

「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々としえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。わたしが地の上に雲を湧き起こらせ、雲の中に虹が現れると、わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」

熊本県の球磨川の氾濫。小さい頃に遊んでいた人吉の町が、水没している風景をみて、思い出と帰る場所がすべて流されたような気持ちになりました。

その豪雨の少し前に神さまのもとに召されていった人吉出身の祖母。祖母の部屋には、一番よく見えるところに「ありのまま感謝」というメモが張られていました。祖母の半生を聞いていると、決して楽ではなかっただろうに、それでも「ありのまま感謝」と最期まで貫き通した祖母の生前の証しを遺品の整理で見つけました。

球磨川の氾濫によって、多くの命を奪った川で、わたしの祖母は、1949年1月21日、冬の冷たい流れの球磨川で、バプテスマを受け、新しい命をいただいた。同じ川。同じ水。その水に沈むことで、新しい命をいただくことも、命の終わりを与えることもできる。自然だから仕方がない・・・思いながらも、イエスさまが息を引き取る時にも、自然の出来事が起こったんだっとなあと思いめぐらしておりました。

これまでの地震でも教会も被害を受け、またそこで命を落とした人たちがいた。命を分かち合う教会で、人が命を落としていく現実がある。自然災害ではありませんが、ルワンダでは、ジェノサイドの中、教会ならば助けてくれるに違いないと、逃げ込んだ5000人以上たちが、射殺されたという事実も、世界の中では起きている。

教会という神の神殿においてでも、理不尽な出来事が起きている。「何十年に一度の大雨」が毎年のように起きている現実の中で、このノアの物語をどのように読めばいいのでしょうか。

ノアの家族以外の人間をすべて流してしまった神さま。

全被造物の創り主である神さまは、ノアの洪水の後、もうこれからは、このようなことをしないと約束をしてくださっています。つまり、人の善悪によって、すべてを洗い流されるという判断はなさないという約束なのだろうと思うのです。

もし、洪水があったとしても、神さまが洪水を用いて、被造物を罰することも滅ぼすこともなさない。それは、神さまの約束です。でも、洪水だって、台風だって、地震だって、わたしたちが住むこの地上では起きる。予想外のウィルスが猛威を振るいます。神さまがすべてをつかさどっておられるのなら、こんな状況を一瞬にして無くしてほしい。安全に、安心して過ごせる時代・・実はいつの時代でも、命の危険と向かい合いながら私たちは生きるしかなかったのだろうと思います。それでも、神さまは、肉なるもの、人間も動物も、すべての被造物をおつくりになられ、自然と共にいけることをうながしておられるのでしょう。

ノアたちは、洪水が終わったあと、どのように生きようかと、箱舟の中で、思案していたのでしょうか。箱舟の中に残るという選択肢があったのでしょうか。

ノアたちが箱舟から降りた後、まず行ったのは、祭壇を築くこと。(8:20)。そして、主への礼拝ささげています。ノアたちは、たしかに命は守られました。でも、洪水の後の世界に不安がなかったわけではない。

それでも、洪水の後には、礼拝をささげたノアたち。今置かれている場で、今命が備えられていること、そして主を賛美することができることに感謝をささげていたのだろうと思います。

2発の原爆が投下されてから75回目の夏がやってきました。いつもと違う夏。原爆投下後、「75年間は草木も生えぬ」と言われた町が、痛みを持ちながらも、平和を祈り求める町として立ち上がっているからこそ、「75年間は草木も生えぬ」町は、今みどり豊かな町として存在し、そこに多くの人たちが生きているのだろうと思うのです。

「ありのまま感謝」はとっても難しいけれども、過去や未来のことを比べて、今を不安に感じて、じっとしていても、何も始まらないんだらうなあと思います。

ノアが、神さまから「箱舟をつくりなさい」と言われて、箱舟を造り続けたように、そして、すべてが流された後、それでも、主に感謝の礼拝ささげたように、あの夏から75年目の夏を迎えたわたしたちが「今」おかれている場で、神さまの恵みに、「ありのまま感謝」しつつ、主の平和のために共に仕えてまいりましょう。